

新刊
月日記
後篇
二

3149
7



13
3149
7

朝顔日記卷之五

故芝叟遺話

柳浪 著



十一回 諫

世の常言よふぬる。會ハ別きの端とやらむ。秋月の
 女見深雪いづららずも日頃慕へる阿蘇次郎と。明
 石の浦の船の上にて。邂逅は環會。二世のちをこを
 約し。即時情郎よまたぐひて。奔る去人と支度せ
 ば。事ありてその船。おはうは駛出せしむへ。ちる
 ぬらずも。父弓之助と共に筑紫の下に。落陵の邸
 へ歸住。深室は閉籠してぞありける。物たもふ身ハ。
 こそが故郷の天ぬから。旅ふしまさる憂は耐て。こが

朝顔日記 卷之五

ねりり。と古歌ふど吟して。いもぬらもず。只顧悲嘆お
くま竹のふし。まぢの月もほのりき。いづまば。ほどく。使
人の面影とへ。幻よりうびつ。塙根よとく。留の切。唧く
く聞ゆる。いよもとぐら我よともみひてや。泣あすらん。
過し明石の楫枕。月の下。臥ひまもぬく。逢瀬おとこよ
萍の生憎嵐は吹散さま。夜にぬらぬ船。いと。影いそまたよ
有明の。おけし。かまずもくか。来て。よるべとか。かつあ
うと身。あくら。はくし。ふと。とらへて。たぐ。さう。背子と。たづね
こび。魂ハ雲井の餘所と。翔夢ハ関路の千里と。往還と
も。とま。バ世と。あぢと。ふと。時あ。て。い。身と。怨。づ。げ。よ。や
死て。こ。う。う。今般よ。生別離。ほど。悲。とも。の。ハ。あら。じ。と。

上古の詩よ。いひけんも。今と。が。上。よ。比へ。ほ。只。菅。哀。慕
の情。お。た。へ。て。袖。ち。く。水。と。堰。あ。へ。ど。と。う。や。さ。て。も。在。鎌。倉
の。秋。月。弓。之。助。ハ。女。孩。児。が。わ。ぐる。情。痴。と。い。え。も。あ。ら。ず。こ
も。ど。ま。た。い。つ。ぞ。や。明。石。の。浦。の。船。の。上。よ。て。深。雪。が。艶。簡
り。く。も。の。と。海。よ。投。ま。と。ま。て。悲。嘆。よ。沉。ま。た。る。風。杖。ハ
あ。や。し。と。も。し。や。い。ひ。か。い。せ。し。意。中。人。の。あ。ま。て。戀。慕
の。餘。あ。り。せ。し。か。ら。ん。り。た。と。ひ。渠。が。あ。ら。う。も。の。ハ。い。ろ。は
ぞ。や。ぶ。と。ぬ。き。人。ぬ。き。と。も。よ。も。駒。澤。が。標。致。よ。い。お。よ
ば。し。女。孩。児。深。雪。ハ。こ。づ。う。よ。深。窓。よ。い。と。く。ぬ。き。バ。眼
界。ま。た。寛。う。ら。む。我。四。十。年。来。天。下。よ。奔。走。せ。し。か。ど。
いま。ど。駒。澤。お。と。き。才。貌。双。全。た。る。人。ぬ。見。ず。と。ま。バ

上五五

三

かまつる。比先ハ君侯の御声がてりて、吐裏は深ぬ
詰号は遇幾年月の苦は病一が、不料色虬之進が暴
小病て亡たる小ぞ、天幸一頭の煩悶を除ぬ、さもあ
るうへハやく、情即は借老と、佛は祈り神は願そ
まを力よあだる二光成とくま、おれもひさや、今日
の御書信は駒澤殿とやらん、新婚せよと強面おる
父の命せ自來こらハが身よいふうく山盟海誓一人
あてて、いりぬる義理約束のあると、露むりても
猜したまいて、こらハごまど允諾もせぬものな、そや許
配をふさせたまふとや、愛慈おきふささうと、往
年の君侯と恨と、今日ハまた父成恨其儘とこは倒と

ふし、夫よあまを、双の袖と顔よね、あて、うと啼
出しけり、おべて情ある女子の態かまうし、母の水青
いよの舉動とさし覗き見て、旁よ人おきと幸とせ
きばらひぬ、おし、深雪が房よ入けを、深雪ハ慌
居ま、おし、襟刷くろひ泣ぬ顔よと、おせども、宛轉た
る愁容、正よ、おま玉顔寂寞として、涙闌干たると
いへる光景、おま、水青ハやとら、側おる琴とね、のけ、
ちうとくとよまを、泣吃せる女見が背かひ撫け、道理
よくとの態言、かく背夫のいたる女見と、春まど死白
慶子のおとねもふも、見よ、いっもおき親心母水青、
やう、やよ深雪、そのやうふしつうるハ、浅香りが失口して

巻五

五

婚姻のふと又聞きしおら人今まであらはよこそいふ
 汝の肚裏は戀人のおはす志ととわとくよまも猜し
 どや、たもひよらぬ今般のこと、汝ハ心は染ぬ姻縁とや
 たりし、且まの父上の御文を見え、婿とつゝハ鎮西の探題
 六箇國の主大内介様の御家老、駒澤次郎左衛門殿とて
 三千石の秩禄知、弓箭劍鎗把て、鎌倉一の武夫、おは
 よし、且文道よもかゝるく、萬の伎藝、何れ一個會せ
 ぬとつゝことおく、来世は希ぬる美丈夫よて、天稟て
 眉清日秀、色ハ雪よま白く、標致氣骨、傑然ぬる人表
 分よ過とら、佳婿と得とるふとく、あの嚴確父上の、おの
 やう小器量のみとまで、精細小か、せたまひき、加旃の

駒澤殿の人品、賞ひ御麾下の世胃かよま、女見と
 賜さん妹と妻さんと、放ぐよま、懇望ありしこと、
 駒澤殿いうぬるふと小、一槩て固く辞さやうこそまし
 ハ、鎌倉中の風説かまば、水人も玉成ことおつつか
 一と、躊躇し、おまこそ月老の結むせたまう、赤繩
 小や、這方よま、い入るやいな、速は承知ありしことよ
 さとバ、父上の命と畏え、こやく承引てたびぬ、こも
 おまバ、親孝行、且ハその身の眞加ぬま、汝ハ戀人と
 つゝハ、比先、宇治の螢狩よてた、一たび見も、見らま
 もおたる、宮城阿蘇次郎ぬ、のみにぬるべし、その人
 ハ浪人といひ、別来弗も動靜も聞ず、おととら、賣僧

秋月弓之助
 妻水青深
 雪に猶失しも
 顯して多分
 庭訓とくハ
 駒沢許嫁
 せんし騙ち
 ところ



駒沢許嫁
 せんし騙ち

雞庵めが騙局など、百般の障砌ありき。ぐる粗語
 あるハ、必竟おも縁の無が故ららん縁ある時ハ千里の
 外もあひ遇からひ、恰ど今般の駒澤どののどく、いら
 とやく事勻こそ、赤繩のあるといふ證據なき、まの
 利害はよく辨明よ、鬼よも蛇よもあらぬ母がなごう
 無仁の處置なれど、さハあを羞といふおバ理が
 聞えぬといふ世の諺、縁有無の縁由といふハ、現在の此
 母が身の上、十八年来はくそ来しも、今愛子の可憐
 といふ愧ぢををてか、とるぞよ、とをいまだ少艾といふ
 乳母が媒小よ、王て、嬾氣のいた王の後先見ず、母家
 の間壁ぬる、此生主水といふ、武士小人志をぞ契と

ため、未の松山浪あすとも、互の盟ハ違いと、もろも
 ふ、ふうくたもひいあり、一年餘と過せしうち、汝の為に
 ハ祖父君、とが父宇佐美弥五右衛門殿、一日御城よ王
 退朝たまひ、母上よ仰すやう、今日ハ不圖御前よて
 君侯某とちうく召ま、汝が女兒水青、とや桃大のふろ
 おまバ、幸秋月弓之助とハ對くの門戸、年紀も似合し
 きよし、弓之助ハ弱冠おまども、緊利発かるものあり、誓
 小取て不足ハあらト、予が媒よて、誓姻申はくらぞ
 こ感佩御上意、弓之助が人品家風ハ從來望ところ、
 殊、嚴命うとどけなく、早速謹諾まうしたる、
 主侯よも、満足よおぼすとの御意よて、御酒とさる

賜さき。御勸あてける由へ一時高興よて歸しぞ。さ
あまは近日弓之助よて黄道吉日なゑらび納采
な贈来るべし。這方よも早くその準備をかとべし
と嬉々よろこびたまふせへ母上ハさらぬ。闔家ご
ぞめきて祝ひもやせど。こまハそれよひをうへて。何
水の出端の嫩ざう。あまを聞てたどらき。恰どそ
ぬこのやうふおもひはれ。先ハ聞るる女心。ひとをぢの
義理よ纏いあるふもあらまど。あまのやるうとぬさふ
一夜牆を越て隣邸よ志のびゆと。主水殿よ遇て事
次叙と流むら小語。あハ何とせんと氣もそむる。浮
沈よせまるこが身のうへ。いっふ取置たまふと。泣つ

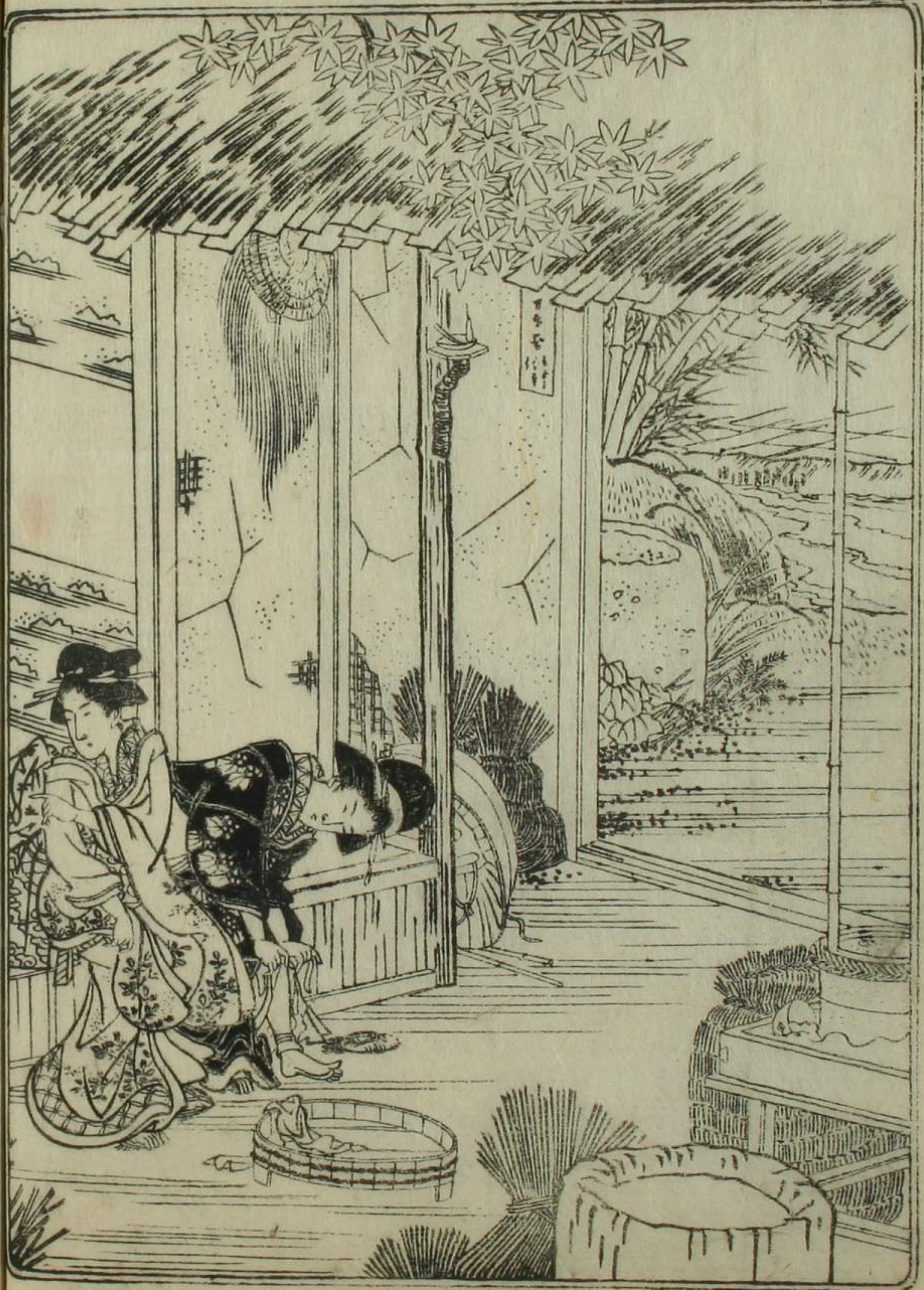
口説つせしうちよ。主水殿も十方ふまを。一休ふは
やあててまうさうい。あハ是非もぬき事體。な。知
るごとく。我ハあまの家の螟蛉子ぬ。那方とい門戸を
相對バ。機と見て婚議申入んと挂念し。う。さすかふ
養母の膝下。あまをれと心ぬらす。遲滞て。今日の今
といぬ。たり。嫡實の母親かま。こく耳小もいきて
商量ともなすべきと。かく延佇よか。あま。あままで
の縁よてあまはらん。ま。和寮ハ君侯の御声。あ
小て。夫人新羅の前の御主持とあま。等閑ぬらぬ
重さ。あま。あま。全く天よ。あま。あま。因縁といふもの
ぬ。我ハ今よ。あま。あま。侍。あま。和御寮

ハ忠と孝とのため。秋月許へ燕雨ぬりたまへ我よ
おいてハ一点も念と遺どと。乾く浄くといひ放さし
わへ。ふまよ腹が立まいものち。たばえず艾とこへはし
て。そいあまアぬる薄情おふせうな。こらハ一たび
山盟海誓ふとぬまバ。ほやおもひあきらむるふといぬ
まがこし。いごふまより何處へかまとも。伴て退たす
う。さらそバ今ふの咥まて。君が又貫つきて死なまし
しやく手おかけて殺してたべと。種く怨かふらぬハ
登時主水どのいしくふハ。そハ女の一途とりふとのか
ま。真情いともあるべきまとぬまども。よく情由とこれ
まへたまへ。我ハ養子の身分。色よまどひて。義恩ふらた

母以捨。極重ぬる義家の名跡と断絶せしめ。またかけ
かまハねども。弓之助ふも。蠢巧の女と妻よしたまへと。
世上よ晒をまとい。ふまやと人情の志のびどるこころぬこ。
孝義ハ天の道。色ハ人慾の私と聞。天の道と捨て人
の私とまらふとい。我ハ得せぬふどふ。和御寮是非こ
も小死ぬんとぬらバ。早く回て。和御寮一個死たまへと。
世またのもしげぬき語ハ聞よア。あまアこのふとよ掃
興こて。呆ままどひて家小回ア。熟右思左想。ひとり
死ぬとらふほどの薄倂郎は義と立ぬき。不孝もの
世は笑うも詮ぬきまとい。あのやくぬる薄倂郎は
ハ。来世の契もたのそぬし。憎とも憎し主水殿への

三三三三三

三三三三三



憤激うとく、一向世間へ志をぬらちふ。寧替嫁して
見せんと心は決し、遂は其の家の渾家と成りし。若
良人弓之助殿ハ謹嚴氣質おまバへと趣よく成りし
ふまてハ心酔即として主水殿のこととも慕ひはまど。
馴染といふものハ、まづ格別なるものよて、いつ良人弓
之助殿が愛憐かア、やがて汝が産しどや、その後街
心よて、主水殿と行遇ふとありし如ど、かの人も具妻と
おきて、いづく慎ふく、いづく昔の風状もせらまず凝
一熱もさめきまて、よくく想ふその時、主水殿不佞
いこそとるが、武人の深切よてありし如て、汝ハまづ阿蘇
次郎王といハ、偕老の契は結びとる。ついでハねし、宇治よて

あひ見しまでのおとと、明石の浦のおととバ夢小も
らねバ、かの人の汝のやう小慕やるとも志らて、今ハ
早妻むべせらまし、もむらまず、をまバ下請の云
おる、蛇の貝の斤想とやらん徒ハ想屈してあら花顔も
つろひしてん、諄言おまども、さきおもつとく、父君の
御書ハ駒澤ハ世ハ冠絶たる風流雄かアといひ来し
たまふ、母もまた耻ともありすほどの深意をこきまへ、父
母への孝行よ、こやく舊人と想斷、笑容駒澤へ花燭し
てたもと、種く小説話たてらまて、女兒深雪ハ其の長語
ハ聞顔さへ得擡ず、泣きまぎきてあまけるが、母の庭
訓の骨髓ハ決、やうく小涙涙と拭ひ、羞澁さ、勿体

の安宅加保 卷之五

〇廿二

ねと、不孝の罪そら怖しく、既然母上の御語を諾ひ
 駒澤殿とやらんは嫁して、御慈悲ふろと父君の御
 ころろ安堵まいらせんと、身の過を悔はく声もか
 ころよ謝申せば、母の水青はふらく悦みび、おの出
 来せし健氣おると、扇たそ賞そや一ぬ、かくて
 復書は志ためて、さといひと好便宜ある小托て、此
 風趣といひやまける、おまよりされ、鎌倉ぬる弓之助
 が僑居よ、氷人の所置よて、駒澤方よし納幣を贈り、
 来せしうへ今又渾家水青が家書とて、女孩兒も
 異議なく承引たる趣を志して、いらく安堵喜ましかき
 了ぬし、ととども深雪ハ一心金石よても堅く、阿蘇次
 郎よ約し舊盟とまもて、そとがためよ節操と水潔し

他家へ嫁づく念ハ露むりてもぬく、あはま、いらくふもして
 おの家は志のひ出帝都よますぬる情郎よ尋遇ぐ
 やと、その便宜とを覗ひける、前の日母は允容の体よも
 てましたるハ、闔家は怠情とさせんと、の私意ぬる一夕
 深雪ハ一通の遺書は留り、黑夜よ紛きて、落陵の邸は
 逃を出、跣踏よ帝都をさして奔りける、おま色膽と
 情痴と小あらしをんば、僅く破瓦の深閨處子、いけてたぐ
 單く行程萬里よ赴くべき、水青ハ女孩兒が遺書を見
 るよ、了勿心地肝潰て、人心地もぬく、慌忙人と走らせぬ
 追っけさせ、祈禱よ卜筮よと騒ぎ惑ひて、狼狽もども

遂に田を来らねば、今如何ふともせんをべねく、泣くひの
よし書ふまじき、鎌倉へ使と駛て、夫主弓之助へ告知
まむ、弓之助の變はとくより、呆と果且駭き且念ふ、
一年明石の船よての風状不得意ゆづと顧しも、必
竟よとまで愛惜も溺も、その查明ともふとて、姑息怠
慢せしこそ悔しけと、ふらく臍を噬て、悶ゆまじし甲
斐ふし、さあを今さら駒澤へ對して、何と謝辞あるべ
き、こそ堂々たる武夫の身として、一端誓約せしむ、ひる
みとあましと、ふてり白く地はまじらざるべき、こそ辱門の
ともあま、深雪の無状よて、當時賢者といはる、駒澤に
耻辱と共んみと千萬きのどくねると、多分と心と傷しり

右思左想せし、猛然一計とおもひはき、こそ賢誓の
体面と掩はんため、一生一度の虚言はつべしと、家諫ど
も堅く守口如瓶して、聽使を差し、女孩兒深雪こと、
不意暴は病て世は早しとべしぬ、互は哀傷よたへ侍る
衛門の計音と聞よ、天を仰いで長嘆し、不好し
我、我不肖なまじも、騎長として國老の事を行
ひ、大國の權柄と掌は握ま、こそは近日は錦を着て
故郷へ歸す、真情比ねき淑女と述好、俱は榮貴を保
べうたもひし、誰うららん、一夕の枕席とも共
せず、條忽我を遺て、一個黄泉の路は赴んしハ、凡

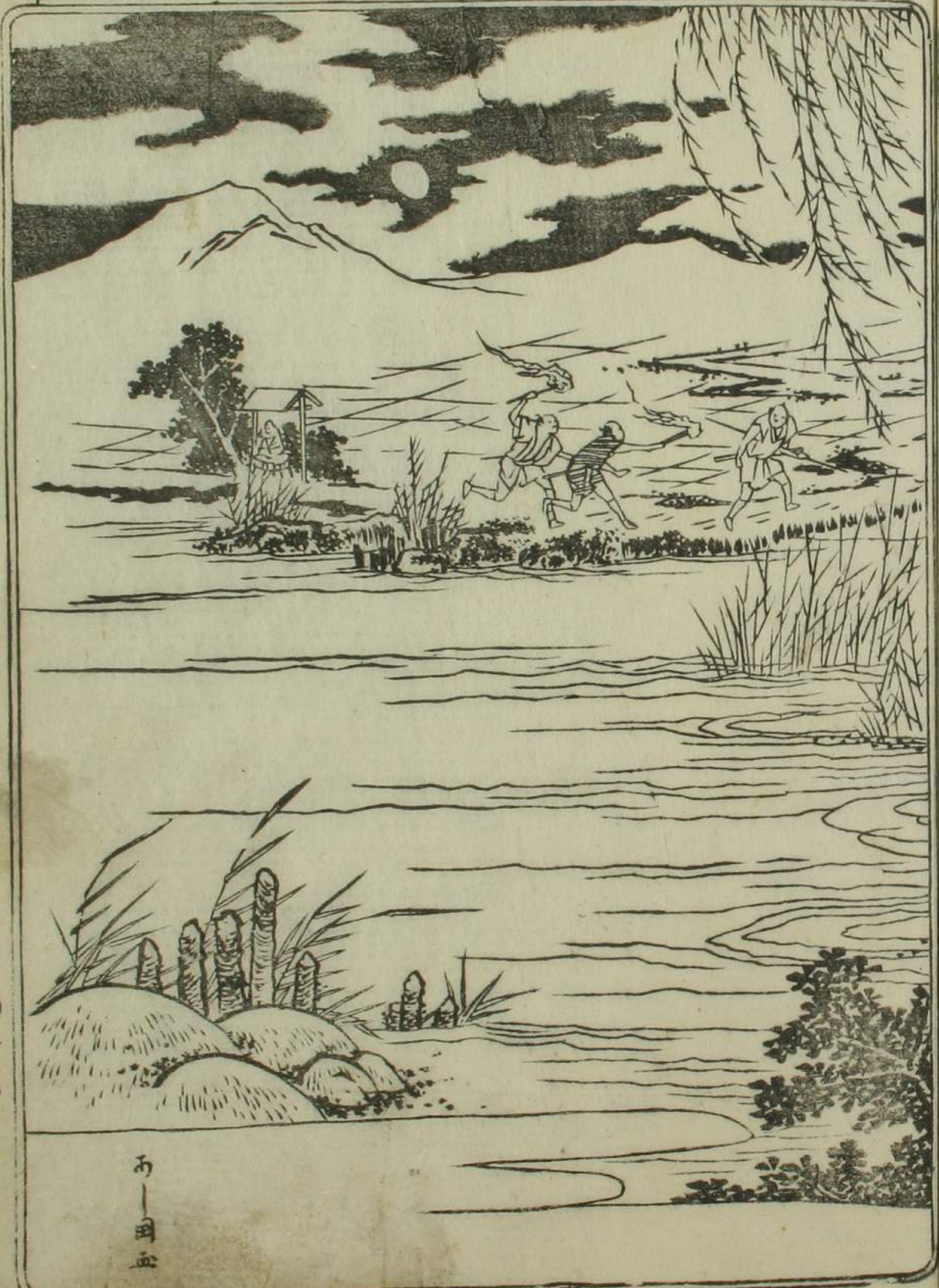
室女ハ氣の肩ハ煩う。習俗思想の餘ニ病亡し。憾
ひべし。痛ひべし。と。声うち吞て。ほどく血の涙を流
ける。さきバ許配の婦人不幸ありしと聞て。ふのち
又陸續縁談といひ入者駭けしめども。次郎左衛門ハ
情人已ニ身まりしうへハ。誓て両田填房と娶るはし
こ。いさ死よくいひ放ちて。續絃の念ハ絶けるとふん。

十二回 時

さても深雪ハ蔭陵の邸とまのび出。只管東を指て走
ける。ぐいつう刈萱の関の古跡とうち過。瀬松の汀をも
北ニ見て。程おく鳥金磯といふ地方よいたる。這里まで
ハ晝間わくも。曉宵の仄くらを間ニ歩ける。遅索る

ものどもいその影たふも看ざしけり。深雪ハまど夜深ニ
起。蓐食て逆旅店にたち出。まの驛の郊垵より後背
に顧をバ。五旬年紀の漢子ありて。青春廿四五とに
ほしき婦人具一来るが。横雲の天おまバ。人顔ハ
おろろげおまど。大抵親子といふらまけり。這の漢子
声とつけて。阿姐ハ獨行と見ゆるが。天照廟ニぬけま
いアせらるる。酒家ハ防州あたまで行ものぬ。旅ハ
伴侶しすうせば。お伴もぬ。申べし。懇よ。深雪ハ
立ちまきて。熟視る。小繁く老實さうぬる。野叟あり。
深雪ハゆる。正是こらり。上國へのぼるもの。そまふるハ
令愛よてもべる。婦女どちハ遠慮もあらざ。さあらば

小川川の
 深淵に
 死んで
 人あつて
 と救ふ



あー国



安尾加保
 卷之五

御行程の斜纏ともあててんと、うち迄までゆく。那の野
 叟が女子めくものハ世ふきたる態して、うらぬくもかこら
 ひけるゆへ、深雪ハふうく安堵でげえ。ゆきくしてこや小倉
 の城下小いり、一間の茶店ハ尻ウけて、一盞茶時憩息ふ
 ぶの時、那の野叟深雪ハ耳語けるハ、おまよて、那邊小
 文字が関とて、旅容とあらたむる批驗所あり。小姐ハ往
 来符牌ともちたまへり。深雪ハゆる、こらり、邊の起程
 小て、さる支度ともぬい侍らず。野叟ハおまをこくよて、
 眉頭ハ卧蠶と起し、そハ不便なるおとらふ。符牌あらざれ
 ば、這方よて水陸とも又通行ことかゝるはず。さても不便と
 りよぞ。深雪ハほどく、十方よんきて黙居たり。や

あてて野叟ハへらく、好子く。あつちよき手段こそあん
 ぬま。酒家親子が通券ハ二人ともきりせり。あつちの字の
 中、小また一点を加へて三の字とぬい。關吏とあつちま
 やとくと通し、まいらせんと。そのま書加、またとら出
 て、やとら關の戸ハいたし、あつちの符牌と懸て、何の苦もぬ
 く、過をましけり。かくて深雪ハ那の親子の客人ハ從
 て、隼人の峽門と渉り、赤馬が關まど看小ける。三個ハ
 おまよて、早路と整て、いそぐほとふ。日あらど、周防の
 國、小瀬川とよ地方より、うづきぬ。這里ハたよそ百戸は
 かり、小村落あり。那の野叟ゆる、深雪ハ對て、這
 里ハ老父郷里まど、緩く茅廬ハ、遍留して、行路の

まのほたるの
文間ぶんまに
べしひ豊とよ豊とよ
翁おきなとして新
意いと圖ずせし
ざうざうこと

疲つか勞らうとも憇やすめたまへ。そのうちふいよき夥おほ伴ばんも出来できぬ
浪なみ遠とほふのし船ふねの便べんとも聞き出でしまゐらせんふとま
すくかみ懇かみふかしくふ巴つば渠みが家いへ小こ来きてとまま巴つば葦あし封ふう茅ぼう
の宇の端はまハ、おのづから胡こ蝶てつ花か生せいていととびー、外と面めん
ぬる打うち麥むぎ場ばハ、雞けいの雛ひなども求もと食じあひ、狗いぬ兒こかど戲たはま
狂くるひつ。そのころとと黄わう櫃び柿しの墜おち紅こう散さん布ふて、ふとと踏ふみ
ハ電でん凧たうとくと鳴なる。野の叟そうハ背せ戸との繩なは簾れんとーとけて入いる。
婆ば々々今いま歸かへ来きハと音ねふハ。早はやかそーと應こたて婆ばの機はたと
下くだたち鬢みづら搔か撫なけ出でむりへ、老おやぢ人ぢ家ぢ什な店やぞよ死し鳥とりが
雁かりしりと問とふ。野の叟そうひとめきて、鳥とりも二ふた羽はまで獲とる。
一いち羽は價あぬぬとさうふもの。とさうやく、深ふか雪ゆきも呼よび入いる。

らまて、裏うら頭あたまの光あかり景けいと見みまはせ、庭にわ竈くわより手て桶か小こ湯ゆと
汲くみいきて拿と来きる。林はやし端はよて盥ら盤ばんよりつー、姐あな々々たら
とぞふ草くさ臥ふたまはん。洗せん足あししたまは、内うち房ふへ往い寛かん
緩ゆる甘あまぎて憇やすたまへとつ。深ふか雪ゆきハ農いん婦ふと對たいひて、ふハ
勞らう汝にぬえ。一いち路ぢもふきの御ご亭てい主しゅの御ご勞らう煩わづらぬぬ侍さむらいと
挨あ扱さくして、草くさ鞋せ肺はい絆はんとほどくよ。皮かわ肉にく腫は浮うて喰くい
たる紐ひもの痕あととへはたとえ。伴ばんの女むすめと共とも一いち浴ゆ盤ばんよて双ふた
足あしとあらひ。やとら厨く房ふは躡ふみあがまつ。婆ば々々ハ笑わら容よう
可か掬かつくま、別べつ房ぼうは誘よびひおき。枕まくらまどあてらひ一いち椀わんの
淡たん茶ちやと拿と来きて、ふぬぬく敷しき待まちける。深ふか雪ゆきハもとふき
深ふか窓まどはひとふ。萬まん事じ初はつく志しく、什な店やの心こころもつらさ

安やす石いし保ぼ 卷まき五ご

一いち十八じゅうはち

きて翁媪が深切とよろあびけり。ときども伴の婦
とバ農婦が女子小しめらぬ挨拶せる由へ。ふうく又
いぶらつてあやぶむ。其の伴の婦いもと。小支那といふ
覇臺の柳巷の遊女まゝ。些はまらぬおとのありやへ。
柳巷と出立して小倉の方へ赴く所。偶と那の野
叟いいであひけり。那の野叟ハ權ハ老實の態ハ扮粧
せども。從來脱圈の吉兵衛と呼く人肉經紀の骨
長ぬ。毘とも脱る蒼狐のぶしき狡獪きものなる由へ
土人も後ハ吉兵衛といはず。狐兵衛くると唱へる。
さまバ這の小支那ハ那の狐兵衛ハ拐掣きて伴らるし
が。小支那ハ自来遊女のふとねまバ。あくまで騙標ハ

たるものゆへ。初ハ吉兵衛が國戸といふことと猜
けきども。盤纏とへ心ままらせぬとぞねまバ假意
とまたる風状とね。中ハ就てよき計較を
ふとんと。まらず顔もてね。て。這里まで從い來し
ね。小支那ハ熟深雪が容止舉動の媳嬢たる。ねて
家令愛なりと見てとり。今ハも國戸が裏ハ知て
堵在こそ痛ハいけと。明の日婆々があらざる閑と
ね。ひ。深雪ハ耳語ていふやう。御身ハ端の纖弱さ。よも
平人ハ在と。かく嫩艾御身ハして。千里獨行と
ね。一。こまハ戀路ハせま。てのふと。ハ。問でもとく
よ。猜ハ侍る。こ。身ハもとよ。往還の人ハ折る。

塙の花。うさ川竹のふがきふ漂よひ世の浮況と看馴
 一かへふの家の主翁とバやくも四戸とい知るる
 この家よ入来ものハ總て不良ぬものむり符牒として
 渠等が隠語と聞侍る小御身と高價よ活逆さんとの
 頭勢ぬ。御身今泥梨地獄に墮たまへハとして解脱
 たまふふとハぬまごご。臆て鯢鯨よる筑紫の果。胡
 笳吹く睦の奥ふら。賣渡さまたまひぬ人あま痛ハ
 一と涙くむ。識趣ほど哀傷よ勝やと。深雪ハよ
 きと聞よ。まも。乍ら面土色のあつく。半响呆て口ハ
 開うど。やあまてとふ。落る涙とはらひ。ふい惠ある
 御語る推量したぐハと。さる仔細あまて。情郎

又たづぬる獨旅。さても伴の野叟ハ園戸よてあてける
 さあま。今ハ籠中の鳥雲井。又回らん由しぬ。一過
 宿世の業よてあまはらん。もとよ。氷操をたてぬく
 己が肚裏。とも故郷と出よ。性命ハ捨て無ものと
 觀念。一はま。機。臨。死。看るま。と。歸がぶと。ニ
 覚悟。さ。ま。看たまひぬと懷裏よ。と。出たる
 護身小刀。試。脱。る。せ。明。晃。たる。銚。の。光。一。ハ
 あざむくば。う。支。那。ハ。た。は。す。毛。簪。して。さ。す。り
 ハ武家の令愛君。潔よき御覺悟。さ。あ。死。ハ。やす
 生。ハ。と。や。ら。ん。ま。こ。一。心。ハ。石。と。も。徹。す。と。承。ハ。死。に。さ
 何どせつぬる御戀路。運ハ仰靠龍天ぬ。御余だふあ

るぬらば、何處どこどのほど小の寛家かんか、環會くわんかいたすへし、
かゝいぬまでも艱苦かんくと志のび、身みと完まるしておたづねあ
を、今日けふ日ひるん主翁しゅおうも、西貼壁せいぢへきよて、四戸しほの夥伴てんぱんどもと
團だん豪ごうをさかして飲燕いんえん一つ、今宵こんせうのうち小逃せうたうをたまへ、
大の舎いへの後方うしろにあたまぬる蘆垣あしぎ一重ひとへぬる、潜出かくしでたす
ほど、いこらひ所ところ不ふどきて、看標まくらの白紙しろしと洗せんけたきぬん
適間さきま屋後うしろより眺ながやまたる小、東北とうほくよめたまて、人烟ひとご熱鬧にやう
き處ところハ城下じやうげりきてねば侍さむらいる、那方なほう小の官道くわんどうもあてかん
とと心こころ當あたまるとたまへと、いと叮嚀ていれいよ教導かうどうと躡うづりて
深雪ふゆが、鬚ひげかどの缶かみともぬと一つ、深雪ふゆハほどく悦よろこひ
て、ふりき姐あねくの好意こういのほど、いつの世よもハ忘わするべきと、あ

はく謝まがを申まをて雲鬢うんぱんよ挿さたる印子いんしの簪かんざしを脱ぬとこ、
まゐりふもと小支那せいなよ與些よとの人情にんじやうとを表あらわしける、
かくて深雪ふゆハ、暝くらやとき曠景くわうけいとまちこび、窓まどよる前裁ぜんざい
の霜枯しもかと眺ながやまバ、神無月かみなしつきハ大おほった、時雨ときぐさがちぬるよ
今日けふ日ひも時雨ときぐさうちりて、いづものあまぬりけり、深雪ふゆハ
獨柱ひとりばしらよ倚よきて居ゐたるよ、入相いりさうの鐘かね、皎々せうせうと遠近えんきんよ鳥度とりど
こや天晚あまのゆふの氣色けしき孕こえむいとぬらろほそさふ、占うらこ
とどもハ獨ひとりおち、雲井うんいとこたる、雁かりの翼つばさもうらやま
くぞねもはるく、みの時ときまと一陣いちじんとらくと大粒おほつぶの雨あめと
ちきとら、浦風うらかぜおどろく、まぐ吹ふ流ながのるおど、柳やなぎ莖かきの類たぐひ
鳴なとやさて、もの冷ひやまきことつとむらぬし、やがて

一盞の油燈と點し、婆々の斜對戸より風呂を呼れて
出せさぬ登時遊女小支那の深雪とひきたて、いごまの
隙は遁たまへと忙したつるふぞ。深雪はそぞろ喜ぶのこ
こ。そのまゝ屋の後まのびゆき。白紙の葉を見らうり。
天の與とやとらと破りて、王出辛うど一小渠
を越、匍匐あうりて、隄はひは走りんとする。天色は
墨とこりたるやうな東西とさへりさまへずたつれもさら
ぬ真の闇脚下の蘆葦叢にて、たゞ一條の反徑を深
雪の杖の料と抜ちたる、牆竹と立て地は跪き、菅聖
と一心と禱す。おの節の葉の倒れ方と東と知ら
ぬたたまへと、念し完す。そのすく手と放し、葉の死の

かたをうねさぐりて、おまをたのそ只顧足し信じて走る
ふ。としをまが葎の刈株にて跟と傷つけ、血塗小ね玉
疼得て耐ぶとこまけり。時むりまあて後背と回顧は
數多の炬ろ照し、罵り騷ぎて馳来るの極めてこれ。こ
まを還来するものおまを、肝魂も身も漆ず、只走れ走ど。
もししりかよいき女の脚、追人の次叙よりちりつきぬ。木枯の
風いよく烈しく、刹那は烏雲が吹掃せば、一龍の藪の透
よまらち戦ふ竹影の金屑と篩らぶとくよて、洩出る月
影は洗し見え、いとあらはなる寒林疎葉大やうねる石
儼の儼然として立おかせ、こまは樹籜とべき所ねく。
進退あうり谷まをぬき、深雪の藪きてうち仰ぐ天も

山田宗之助

二二

あはまゝ月蝕のまゝと仄ぐらくおぼえまゝさる。死すべき時
 小死せさまば。死よまゝさる羞あまゝと懐おる短刀と搜ふ
 いつの間まゝハ脱落て。今ハ寸鐵とも佩さまばよし
 さらばおの涙身と沈てや死まゝし。濟曲の水の深
 處とたづぬ礫と投て見てあまば音とへたぐぬ浅鹵ぬ
 さらば縊て死をべしと下括とほどさて幸と江よのぞこ
 たる柳の垂朶よりちかけ園児とけくらして襟とまゝ阿呀
 崖より飛吊んと。南無と一声叫ぶ時。この濟曲は候泊
 せし干船のありておの船の客人よ念佛者と見えて
 程近き村落の十夜は泰。抵今こが船は廻り来り。隻
 手小ハ小提燈と提。隻手小ハ珠數凡ぐりて。南無阿彌陀仏

南無阿彌陀と唱へ来りし舳舂の拍子よ。今深雪が
 南無の一声と聞縊死と看るよ。矢庭は飛ひつて
 抱きとり縊繩とさへ奪ひて。月光は照し見まば。十
 七八の麗人ガ。年ふる柳の下小あて。十指合せて。縊
 繩小とヤ吊下らんとせしところぬ。那の客人多
 と深雪とぬだり。あらまゝ死とべき縁故と耳。已
 名取ともあ。目前見殺をるハ何とも痛まゝく
 忍びごとし。些の散財ハ從他。後果のため小。おの老人ガ
 救護さうさんと。叮嚀よへたはるうち。こや遅くけ来
 者ども馳はきて。口く小罵さ。緊要の奇貨と捧ふ
 らんとせしとて。直よひつたすひあどり。往人とせし

ハの右まは
小堂小若界
ふとせめは
ハ



安主加保
卷之五



あし

廿四



安主加保
卷之五

廿三

那の于船の客人とけ入て。種々愛ひ懐中の財布よ
了。金子ととり出し。那の毘脱の吉兵衛よとらせ。ま
三片ぐりてと逞捕の者ども小遊興無難事と完し。
深雪を伴回。船頭と呼起し。仔細あまバ早く船と出
せと催促る。船子ども心を得て。そのまゝ鉄猫ひさあ
げ。遠の灘へと潜出す。深雪ハ弘誓の船の扱と得て
園戸ヶ鰐の口と免り。念佛者の老人の功德と嬉し。
宛も地獄よて佛よ遇し心地せ。恰好順風つよくふ死
出せば。やがて蓬と拽あげ。五六合もたせて。唯一夜の内ふ
數十里と走り。播磨の室津小ぞ着小ける。あの客人と
つひ。この室津の迷魂陣の亡八よて。夥の妓と養標客

と待た過活とせ。一座の花院の主翁ね。舗号と大
黒屋とし。名公吉兵衛とつひ。この吉兵衛ハ生を得る没
一眼ふるちへ。眇の吉兵衛と綽名せ。もとふの吉兵衛ハ。
檝丁のふとねま。常々田舎経歴して。妓子買ふ罷し。
防州小瀬川ハ。園戸女還の巢穴ねま。とて。とくより。這
の處よ来り居て。その奇貨と穿鑿せし。頃毘脱の狐
兵衛が。匂引して。兩個の女と伴来たりし。由へ。密に現ひ
相て。とや價定まり。この渡世よ狡猾眇抑巷の
落第の蒼妓ハ望ます。只處子の深雪をほり。が。多
量とるよ。狐兵衛ハ。深雪が身價と五十兩よ。ハ減まし
といひ。けり。さきとも眇ハ中く合点せず。皓齒ハ由

ある奔女取て強て苦界とせんとせば自害一果て原
 價までも囷圖烏有と。まの説話と枝葉つとて已に
 破談にもふるべきと。牙僧ども種々と唆居る時にも民
 脱が婆くハ晝間小支那と深雪が耳語わひしことを壁耳
 せしう。口囂き惡婦のぬらひ。湛らぬて両吉が價論の
 坐小こし一五一十告けるゆへ鬼と欺く眇の吉
 志まよはけこそそのまゝ三十金を買落し。さて件の演
 劇と草曲意と假造ぶとして。虚念佛者とぬきて如せ
 一ハと這の眇吉ハ夫あり子ある中ととへ裂りりて買
 取種々奸計と運らし。如何なる鐵肝石心の婦人たり
 とも。うましく苦界と墮しむる。老賊ぬるゆへ。むる造と

おとして深雪が必死を救ひ。ふりく恩と擔せ。よんどころ
 ぬき義理と迫て苦海と溺んと巧計しものか。深雪
 ハかく欺りましとハ夢小もまらば世ハ慈悲善根の種
 萌念佛者もあるものうふと。たもひの外。深が家のこまこと
 見まば。まこ小風月場とおほし。く。夥の姉妹の粉頭と
 も。ゆごましく脂粉と疑し。媚と献し笑と賣ふゆへ。標客
 旦夕入集合ていと熱鬧深雪ハまの光景と見よ。胸と
 うつてその薄命と歎き又しもかく行先どきか。る。艱
 難よまのひうね。數回々死路と索し。うど。とふりく小支那
 が訓と守る。生、かたしとおもひ回し。さしこむ痞とど
 ねさへける。大黒屋吉兵衛ハ。老婆のね六と熱く議り。夜

又またやく度や婆りてふよくく吩ひ咐やくけるよ。度や婆りていふことを允のこ諾こ。
別い房まの籠こに居ゐたる深ふ雪ゆきは對むかひ家あ主まがその死しと救すくひ。
天あま大だいの財たからと費つせし恩いん誼ぎのほどと口くち説せたてそまを償つぐふ
料あの半はん年ねん乃至いた一年いちねんむうまも。苦く界がい小せう出いらまよ。僥やう倖じやう
ある財かね主もちの半はん老らう子し弟ていの梳か弄りのこと瓜う約やくせし由よしと語かたふ。
多た方まが賺とらし瞞たらし。あるハ嚴げんしく催せ逼せふとまども。深ふ雪ゆきハ
一いっ切せつ承じやう引いんず。艷えん然ぜんとしていふやうとハ心こころが得えぬふとうか。
こが一いっ命めいと助たすけらまたるハ。慈じ悲ひある家あ主まの好かう意いとこ
そおひひつま。さる怖おそ意いき言ことハ聞きこへ耳みみ汚けがまてべるふと。
雉けい子し搏わふる態かたちかまば。度や婆りてハ深ふ雪ゆきが執しやく意いと恚いきく只ただ得え
堅かたとたりて家あ主ま夫婦ふうふのよいと告つげまば吉きち兵へい衛ゑい聞き

よま大だいき小せう怒どり。洒しや家か若わ于じの金かね子しと費つやし。頗おの
辛か勞らうして買か取と来きまし。ハ全まく本ほん院いんの聚く寶ぼ盆ぼんよせん
ためぬま。允のこぬとて允のこさすよ終しゆうらふと。眼めと忿いんりし
て度や婆りてと叱ちま。そま早はやく厮まと羸あふか。たもふこま
削け刀とう鉞えんと刺さふどく氣き喘ぜん々々。搗う子しね六むハ慌あわ夫お夫とは撐せ
任か。かえらばすもこやまてたまふ。且ま霎しやく時じ待まちたまへ
那なの小せう姐じやハ歷れき々の武ぶ弁べん出し身しんと見みゆると強かうは呵あ責せた
まら。舌しや嚙せ切せても死しうぬまどき舉あ動どうぬま。さある時ときハ
損そんと損そんと累かさる道だう理りまづ奴なんは任まんせたまへ。今いま一いっ回かい論ろんし
見み侍しやうてんと。漸や宥うめ課かて。己おのが縫ぬい房ぼうハ深ふ雪ゆきを呼よよ
せ。見みまばとるやど臍へしたげよ。その容ひ止との貴あは艶えんく心こころ可か

羞態ぞ一たる。お六つやう和御寮ハ今三十金餘の價
 貸とぬりたまへば。そまを償ふ資あらずハ。少間若
 界ふしたまはでハかまふまじ。さろと公然まもいて在
 けるこそ心得ぬ。度婆どもハ鬼くまきものふて。今御寮
 小憂目と見せんと弄ぬると。幸してとめ侍りて。和
 御寮ハそも如何ぬる人よて如何よおほさるやと。いせ
 温和より問は。深雪回答てつゝやう。こらりやうら
 もの女見ふて。縁故ありて只單身。即と尋ねて都方
 へ登るもの。最その人といまど枕ハいとねど。一回盟約て
 しくへい。水火と踏ても偕老人とねもひとべる。そのまは
 いう小責えたらま。縦令段々小斫きごまろくも。氷雪よ

と潔よき山の身とあてう汚すべき。いつそ前の夕縊ま
 死ふ。かくむうて可惡語ハ聞まどき。自来死と待覚
 悟ふまども。あまの家主の散財のそ一個の遺憾もあもひ
 侍る。奶々倘佛心あらば。情願債とまはし猶豫こまて。
 家もの不満と宥らま。許して帝都へ上せとて。尋る
 即ち會面しうへい。金子ハ倍して還しとべらん。ともあ
 ば。折角小瀬川の汙よて必死とこらひ給て。功德も水
 小ふまはせと。奶々の厚き底とば。うて生涯忘まんこ
 涙と共よかきらどく。却是ハ識趣の亡ハのお六。深雪が
 真心感ぜしうへ。そのつゝあとも理かまは。快く諾ひて。つ
 小も和御寮の肚裏。あしうてまいらせて。痛ハ

みそおもひ侍を。吾們の軽賤過活ハ做ども一是不
知人情ふもさうらひす。大夫が眼前ハよきふいひふしき
かるべう取置侍らんと。かを懇よりち語らん。お六ハ深雪
が起たらあとして。吉兵衛と相對百般と利害と解き深
雪が義烈と委く語り。那の小姐の氣象の猛し。一心
戀は凝て。石もぬきまどき貞女精神強て迫ら
ば死を催るといふものぬき。周防の女還を捉来て。いふ
説話寸も報賽已過。這方にも影護まよあをバ凌
虐あしハぬきと。あの児ハ極めて世裔の愛女児ふら
ん。寧籠とあけて放ちや。尋ぬる人ハ遇せか。金子ハ
定てうへとるべし。よーまよ萬ハ一個齟齬たるその時ハ

奴が四季の新穿と製まひほとよ。そまぬも頃損
あハ一番奴とたて。允容て恕てやら志やまとい。眇の
吉兵衛ハもとふと事小熟せ。有名の奸獍折角小
瀬川よて。十夜歸の演劇と做せ。人と騙寸圈套も徒
ことハぬきたまども。とてもこの術てちやぬ。奴。倘万一
迫り殺してハ。半文錢もしからぬ。乗除且得意の艾
婦のゆいところ。緊の了簡ぬきと一決して。一向齊と楚
懇切よて。放ちやるふ。志と。意と曲て菩薩面とつくり
夫婦しろとし。種々小款待。幸よき便船と聞出し。船
工も入魂の者よて。老實ふま。バと。ふまを托して深雪
と載し。浪花まで送着さんと。萬信くく。経呂々。

巻五

七

深雪しまと亀婆お六が庇の遭虧小よして、奇難と免
かも、剩ふべきその懃と受りバ、別よ臨て何とぐる心
は、その謝儀とふさんと、旅の調度を捜せども小瀬川
に遁し時包袱遺おきつ、家と出る時、夥の人目
忍びかね、髪飾も取る間かく、僅よ家常の櫛と印子の
簪を挿とるやうして、奔りて、別よ價のわる東面も
あらねば、唯一枚の玳瑁の櫛子とバ、お六よ與て別敬とぞ
またとける、

